

国内経済情勢

概観

内需は依然低調を続け、在庫圧力もなお強い。え、経済界にはやや心理的な委縮もみられ、商品市況は依然軟弱な地合いを改めるに至っていない。このため企業は生産調整の強化など市況対策をさらに進めつつある。こうした国内情勢を背景に国際収支の面では、輸出の好調、輸入の落ち着きに伴う経常収支の大幅黒字が続いているが、一方長短外資の流出超過から総合収支は引き続き逆調となった。

企業の資金需要は依然低調であり、金融機関の融資態度も、一部には金融市場の緩和を背景に積極化の気配がうかがわれるものの、総じてなお慎重である。

こうした情勢にかんがみ、財政面の諸施策も逐次打ち出されつつあるが、本行も、先月下旬の公定歩合引下げについて7月8日準備預金制度の準備率の引下げを決定し、16日から実施した。

商品市況は引き続き軟弱、市況対策強化の動き強まる

6月から7月にかけての商品市況をみると、羊毛糸、ガソリンなどごく一部の商品が比較的堅調であるのを除けば、大勢として軟弱な地合いを改めていない。4月から5月にかけて底固めの気配もうかがわれた商品市況が、その後引き続き不ぞえに推移しているのは、季節的不需要期による面

もさることながら、景況の先行きに対する気迷い感からビジネスマインドがやや委縮に傾き、荷動きを低調ならしめていることによるものとみられる。また最近に至り、鉄鋼、繊維などの輸出成約に多少の鈍化がうかがわれはじめていることも市況の足取りを重いものにしていく。

こうした状況から、産業界には自主減産や不況カルテルの結成など市況対策強化の気運が一段と高まっており、その効果が注目されている。現に7月中央以降鉄鋼には下げ渋りの動きも生じており、これは梅雨明け後の実需期待のほか、懸案の粗鋼減産の決定がかなり好感されたものとみられる。

6月の卸売物価は商品市況の不ぞえを映じて前月比 -0.3% とかなり大幅に下落し、7月上旬もまた前旬比 -0.1% 低下した。

6月の消費者物価(東京)は、野菜などの下落にもかかわらず、宿泊料、入浴料の大幅上昇、家賃の引き続き上昇などから前月比 $+0.4\%$ と反騰した。

生産の抑制基調続く

6月の鉱工業生産(季節調整済み、速報)は5月 -1.9% のあと $+2.3\%$ とかなりの増加となった。財別にみても、耐久消費財が微減したほかは軒並み増加している。もっともこれには電力向け大型機械の完工、石炭などの前月ストライキの反動増といった特殊要因も響いているようであり、月々のふれをならした実勢ではなお抑制基調が続いているものと思われる。

6月の鉱工業出荷(季節調整済み、速報)もまた+3.3%と著増を示した。ただ、出荷についてもおおむね生産同様の特殊要因が働いていることは見のがせず、その基調に大きな変化があったとはみられない。

6月の鉱工業メーカー製品在庫(季節調整済み、速報)は+0.2%の微増となり、在庫率は-3.0%の低下となった。上記の生産、出荷の実勢からすれば、目下のところ在庫調整が目立って進展しているとは必ずしもいえないようである。

企業の設備投資は総じて低調に推移している。先行指標である機械受注の動きからみても、当面この基調が続くものと見込まれる。

外国為替収支は経常黒字、資本赤字の状況を持続

6月の外国為替収支をみると、経常収支の大幅黒字(68百万ドル)にもかかわらず、資本収支が126百万ドルに上る流出超となったため、総合収支は前月に引き続き赤字(38百万ドル)となった。

経常収支の黒字は、貿易外収支の引き続き赤字にもかかわらず、貿易収支が123百万ドル(季節調整後では160百万ドル弱とこれまでの最高)の受超と好調を維持しているためである。資本収支は長期資本、短期資本ともに流出超となった。最近における資本収支の逆調は、輸出手形の買持ち増といった輸出の好調に基づく面もあるが、他米ドル防衛に伴う資本流入の不振、ユーロダラー市場のひっ迫のほか、内外金利差の縮小などの諸要因によるところも見のがしえない。

6月の輸出は、為替、通関とも前年同月比+30%強の増加を示し、依然好調を維持している。商品別、仕向け地別にみても、目下のところ従来の基調に大きな変化はうかがわれない。ただ輸出信

用状をみると、依然高水準ながら、前年同月比伸び率は6月+19%とやや鈍化している。

6月の輸入は前年同月比為替で+6%、通関で+9%と落ち着いた動きを続けている。商品別の動きを為替で見ると、食料、木材などがかなり増加しているが、その他は概して低水準にとどまっている。輸入先行指標や国内経済活動の動きからみても、当面輸入はなお落ち着いた足取りに推移するものと思われる。

資金需要は引き続き低調、債券の消化は好調

銀行券の増勢は引き続き落ち着きみながら、6月の増発額は季節的事情から1,028億円に上り、他方財政資金も609億円の揚超となった。これらに対処し、本行は月中1,600億円の債券買入れを行なったため、金融市場は総じて平穩裡に推移し、コール・レートも月中日歩2厘低下した。

6月の全国銀行貸出増加額は前年同月を若干上回ったが、平均残高などからみた貸出増加の実勢は引き続き鈍いものとみられる。これは、資金需要に依然動意が乏しいうえ、銀行の融資態度もコール・レートの低下や本行貸出増加額規制の撤廃などから一部には積極化の気配が現われつつあるものの、大勢としてはなお慎重なためである。

全国銀行貸出約定平均金利は、年初来5月までに日歩3毛の低下にとどまっているが、6月末における自主規制金利の引下げを契機にその低下は一段と促進されるものとみられる。

他方、株式市場は依然低迷を続けており、これに加え、金融の緩和などから、このところ確定利付債券に対する法人、個人の需要は顕著な増勢を示し、公社債、金融債などの消化環境は好転しつつある。